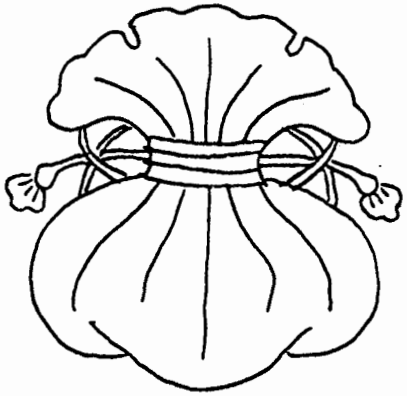
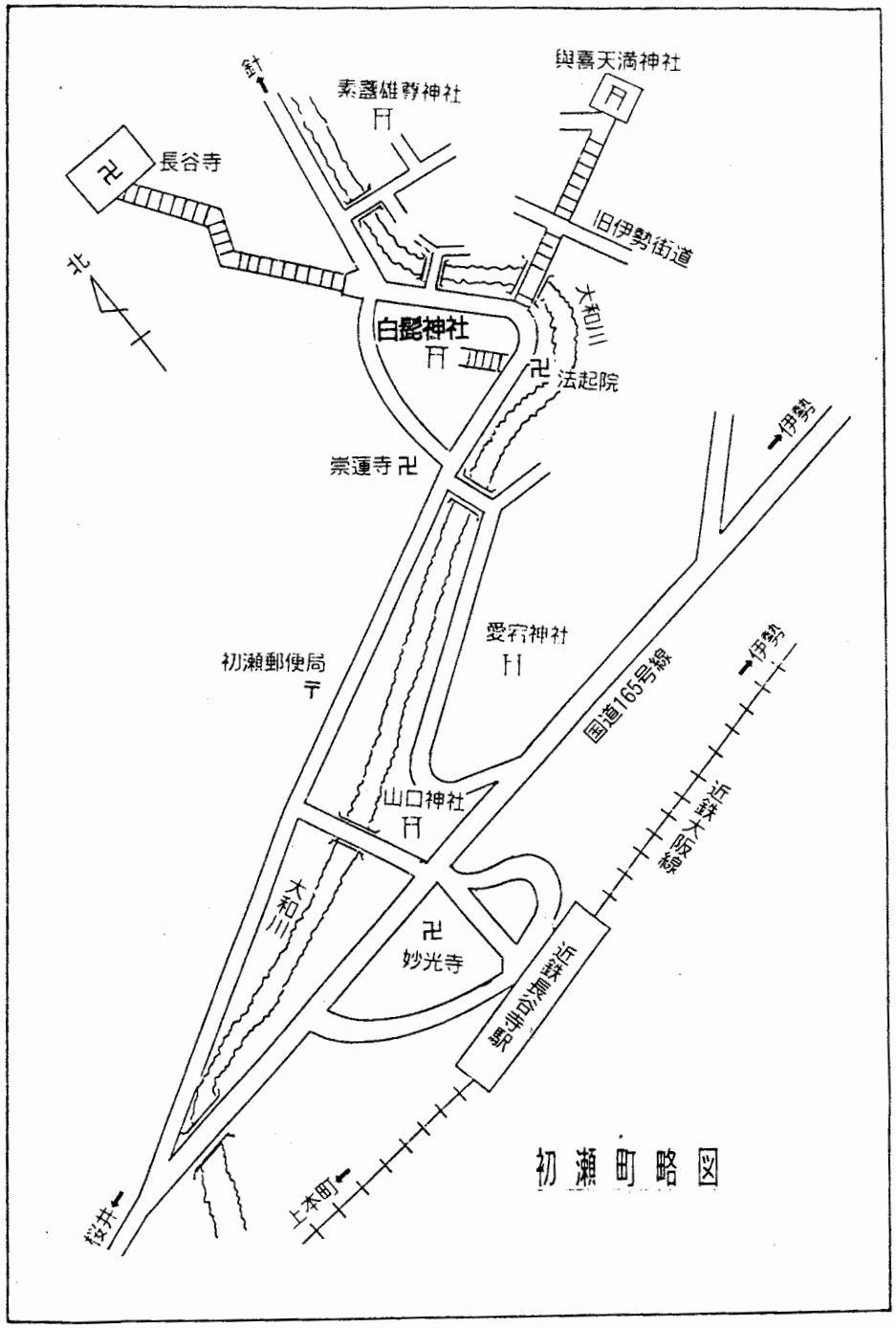
# 白髭神社



白髭神社神紋

（砂金袋）




初瀬町略図



目次

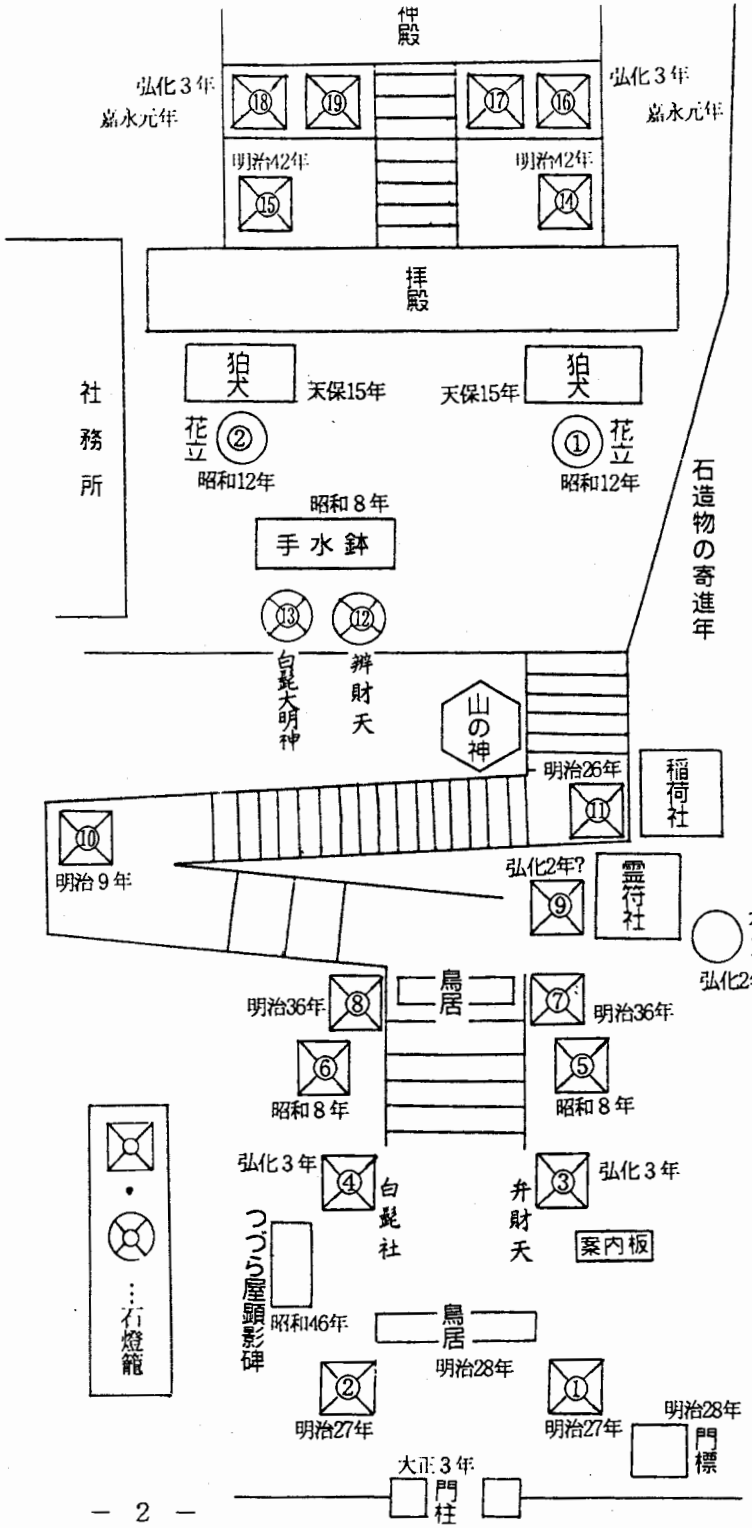
桜井市 初瀬町 略図 …… 一
白髭神社境内図 …… 二
白髭神社の由緒 …… 四
長谷寺本尊十一面観世音菩薩造立の経緯 …… 五
白髭神社の御祭 …… 七
白髭神社の境内社 …… 八
白髭神社の境内 …… 十一
白髭神社の変遷についての考察 …… 十七
参考資料 白髭神社の分布 …… 二〇
長谷寺境内図（寛永十五年作） …… 二一
境内石蔵物寄進の辻屋與八 …… 二二
あとがき …… 二三

# 大和國式上郡初瀬村白鬚神社圖

明治七年九月
神社取調図下案報告書より
祠官 田守源次
祠掌 岩井豊恭



# 境内



# 白髭神社

奈良県櫻井市初瀬字木小路

御祭神　猿田毘古命・天宇豆賣命　〔天鈿女命〕

御神徳　厄除開運・家内安全・無病息災・事業繁盛・良縁子孫繁栄

御創祠　天平勝宝元年己丑十一月　天平勝宝元年（西暦七四九年）

御由緒　昔、近江国三尾（滋賀県高島郡高島町白髭神社鎮座地）の裏山から霊木が流出し紆余曲折を経て、約二百年後に長谷寺下の初瀬川に流れ着いていた。この霊木を徳道上人が現在の白髭神社裏の丘に引き上げ、仏師稽文会・稽主勳を中心に十一面観世音菩薩を刻ませられたのが長谷寺御本尊十一面観世音菩薩である。

この霊木が近江国三尾から流出後、常に三尾明神がこの霊木を守護し、付き添われてこの初瀬の地まで来て下さったので、この地に祠を建て三尾明神としてお祀りしたのがこの神社の創まりでその後、大川明神と改名され、更にその後に近江国白髭神社の御祭神猿田彦命の御分霊の勧請をうけて主祭神とし、併せて天宇豆賣命（天鈿女命）を相殿にお祀りして今日に至っている。

『三尾明神』について、「高島地方の古代史話　水尾神社の縁起解明」に次のような文がある。

猿田毘古命は、天孫瓊々杵尊が天尊降臨の際、天鈿女命を通じて瓊々杵尊一行を道中の障害を排除して、鵜川の仮宮に案内した。このことから猿田毘古命は瓊々杵尊より幸前駅神という称号が贈られた。その後、更に瓊々杵尊が南に向かわれた時、比良山から琵琶湖に突き出した岬鎧崎、吹卸、鏡崎の三ケ所を猿田毘古命が切り開いて案内した。瓊々杵尊はこの労に感謝して重ねて**三尾明神**の称号を与えられた。そこで猿田毘古命はこの辺りを三尾里と名付けた。

この文では、猿田毘古命と三尾明神とは同一人物である。



長谷寺本尊十一面観世音菩薩造立の経緯　（菅原道真執筆『長谷寺縁起』による）

(1) 近江国三尾前山（現　近江白髭神社後山）に十丈（約三〇m）の楠の大臥木があり、常に瑞光を放ち、異香を薫し、白蓮華を散らしていた。

(2) 継体天皇十一年に大洪水が起こり、この大臥木が谷から大津の町へと流れ出した。

(3) この大津に七〇年間留まり、里人が枝を切ったために、災難や疫病が発生した。

(4) 用明天皇元年（五八六年）大和高市郡八木の小井門子が夫の菩提を弔うために仏像を造ろうとして自分の里に引き帰ったが、間もなく門子とその父母が死去し、里人にも不吉なことが続いた。留まること三〇年。

(5) 推古天皇七年（五九九年）葛下郡当麻の里に移されたが、ここでも里人に不吉なことが起こる留まること五〇年。

(6) 天智天皇七年（六六八年）城上郡長谷郷神河浦に移される。留まること三九年。
(7) 徳道上人十五年間、精進修行をされる。
(8) 養老四年（七二〇年）二月、霊木を東の嶺に引き上げ、庵を結び香花を供え、三宝の加被を願われた。
(9) 神亀元年（七二四年）四月八日　霊木を加持し、仏像を彫りはじめる。
仏師は、稽文会・稽主勲の二人。
(10) 神亀元年四月十日　二丈六尺の十一面観世音菩薩像を彫り上げる。（三日間）
(11) 徳道上人の霊夢で大磐石を感得し、その上に十一面観世音菩薩像を安置される。
神亀四年（七二七年）
(12) 天平五年（七三三年）五月十八日　開眼法要が行基上人の導師で取り行われた。
（長谷寺縁起には、寛平八年（八九六年）の奥書がある）

霊木が近江国三尾から初瀬に来るまで約一五〇年が経過し、十一面観世音菩薩像が完成するまでに約六〇年かかり、結局、近江三尾を出てから約二百年余の期間が経過している。
現在の十一面観世音菩薩像は長谷寺の何度かの火災で、天文五年（一五三六年）の造立である。



## 御祭神

### 猿田毘古命

この神様は、天孫瓊々杵尊が天高原より豊葦原国に下るとき、国津神として天之八衢にいて、神々を恐れさせたが、天宇豆賣命の説得によって神々を案内先導した。このことによって猿田彦命はこの後、天宇豆賣命に送られて伊勢内宮の近く、現在の「猿田彦神社」に住み、天宇豆賣命と結婚したと伝えられている。

猿田毘古命の身体は大きく、鼻の高さは七咫、身長は七尺、力強く、威風堂々とし、目は鋭く輝いていた。天狗の姿の原形といわれている。（一咫は約十七～二〇㎝　一尺は約二七・五㎝）

中世になって「猿」が「申」と発音が同じことから、庚申信仰に発展し、道祖神と結び付いていった。

猿田毘古命の御神徳は深く、我々の生活全般にわたって霊験あらたかな神様です。

### 天宇豆賣命　（天鈿女命）

神代の天の岩戸の段で、天照大神のお出ましを願う神々の前で、桶の上で踊ったことが、後の神楽舞の起源といわれている。このことから、歌舞、音曲等、芸能方面に霊験がある。

また、天孫降臨の時、五部神の一人として従い、出迎えた国津神猿田毘古命と結婚した。

## 境内社

### 稲荷社

御祭神　宇迦之御魂神　別名　大宜都比売神・大食津姫神・保食神・豊宇気毘売神

この神は、素盞雄尊の御子で『日本書紀』にある倉稲魂命と同神で穀物の神である。宇迦は食と同じで食物の意味である。延喜式大殿祭祝詞の中に「是れ稲の霊なり」と記載されているところから、稲の精霊とされていた。

御神徳　一切の食物を司る神様。食の御霊の大神といわれた。　五穀豊穣・商売繁盛

人の身体を養う食物は、皆この大神の恩恵を蒙らないものはない。

「稲荷」の語源

『神代記』に「保食神腹中に稲生れり」ということがある。

別の説に、昔、弘法大師が京都東寺の近くを歩いていると、稲を荷なった老人に出合った。大師は翁から色々教えを受けた。これは神が翁の姿になって教えて下さったのであろうと、早速そのお姿を神として祀り、稲荷明神として東寺の鎮守とされた。

真言密教では稲荷神は吒枳尼天と同一神と考えられている。

稲荷信仰と『狐』

吒枳尼天は夜叉、または羅刹と同じように自由自在に神通力を使い、六ヶ月前に人の死を知り、その肉を食べるという強力な存在である。中世にはこの神の本体が霊狐だとされるようになり、狐の霊力にあやかろうとする信仰が広がった。それは、やがて狐は田の神のお使いだという農民の信仰と結びついて、稲荷神自体を『狐』と考えるようになった。

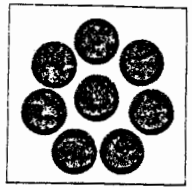


### 山之神

一般に『山之神』は岩上・古木の株・坂の上・峠・等に祠られている。通常これらの山之神は『田乃神』となられて信仰されることがある。山之神が田之神となられるのは普通二月頃で、農作業が始まる頃より山を下って農地を守護せられ、稲の稔るころには山に還られ、山之神となられる。従って、毎年秋に山之神を祀るのは、田之神として野へ出られ、用を終えられもとの場に遷座されたとするからである。

### 霊符社

御祭神　国底（常）立尊



神紋　八曜

この神は、天之常立神に対する神名で、国は天に対する地の意味を表し、国土を神格化されたものであり、国土の総てをご存知の神である。

国底立尊は、天地開闢の時にあらわれた神世七代の一人である。

〔神世七代〕天之御中主神・高御産巣日神・神御産巣日神・宇麻志阿斯訶備比古邇神・天之常立神・国之底立神・豊雲野神

御神徳　方位を定め、造成の神として悪運を除去し事業の安全と成功を守護する。

霊符信仰は広範囲にわたり、一般には『鎮宅霊符神』、妙見さんとして崇められている。

霊符神は各宗教によって名称は異なるが、御神徳は同様である。

神道 … 天之御中主命

仏教 … 北辰妙見大菩薩

道教 … 太乙救苦天尊・太上神仙鎮宅霊符神

鎮宅霊符神は北斗七星を中心とした天上の星々を神格化した神で、北斗七星は北極星（天帝＝北辰）を中心にして廻っている星座で、天帝の乗り物になり、人々の生死、禍福を支配するとされている。

前記から、この信仰は多方面に発展し、特に、北辰信仰から密教の妙見信仰が起こり、一般世間に広まっていった。

鎮宅霊符神とは、おそらく、種々の目的の霊符をその目的に応じて修法し、富貴や子孫繁栄除災等を祈念して、お札が授与されるのである。

『霊符』は古今を問わず、世界中で人間の力を越えた不思議な力を活用する手段として、さまざまな霊符が用いられてきた。従って図柄も多種多様となっている。

道教では、元来、古神仙が天地自然を写し取ったもので、神々が授けたものであるという。

この考えが広まり霊符というものは、宇宙の生成化育、変化流転の相の表れであるから、一つ一つの霊符の形にそれぞれ深遠な意味があり、宇宙間において律動する神秘的な力がその形に共鳴を起こし、不思議な力を発揮するものとされている。同時に神霊と人との結び付きによって、霊符を持つものに何等かの神霊の加護があると考えられている。



境内

（石燈籠下の数字は二頁の境内図の石燈籠の番号です）

門標　花崗岩

銘　正面　白髭神社　大阪道頓堀大黒橋／飯田新三郎建之

側面　明治廿八年十一月

総高　二五〇㎝　巾二六㎝　厚一八㎝

門柱　一対　花崗岩

銘　西側　大正三年一月建之　田中又二郎／発起人　藤木久吉

東側　中山□□／井上清八

総高　二二〇㎝　巾三〇㎝　厚二三㎝

一の鳥居　花崗岩

銘　西側柱　明治廿八年十一月建之　大阪鍛冶屋町／稲村治郎兵衛

東側柱　當町　五味原　茂／岸井茂平　大阪道頓堀大黒橋／石工飯田新三郎

総高約五〇〇㎝　基部間隔　二九〇㎝　柱直径三〇㎝

額　白髭神社　陸軍中将　堀丈夫　化押

神殿　南向　春日造　千木付　桧皮葺

建立　天保二年十一月　？

桁行　四尺五寸（約一三六㎝）

梁行　三尺六寸（約一〇九㎝）

拝殿　切妻造　千鳥破風付　瓦葺

建立　天保二年十一月　？

桁行　三間（約五・四五m）

梁行　二間（約三・六三m）

社務所　東向　切妻造玄関付き　平屋瓦葺

建立　昭和五十五年九月（改築）　棟札　大正九年十月書

桁行　約六m

梁行　約十三m

狛犬　一対　狛犬

大きさ　狛犬　高さ　約七〇㎝　幅　約三〇㎝

台座　高さ　七〇㎝　最大幅八〇㎝　最大奥行五五㎝

銘　東側　天保十五年甲辰三月吉日　五味原長七（天保十五年　一八四四年）

花立　一対　花立①②

①銘　正面　奉　側面　昭和十二年一月　五味原もと

大きさ　直径二七㎝　高六三㎝　台座巾三三㎝　横十七㎝

②銘　正面　献　他は①と同じ



手水鉢　安山岩

銘　正面　奉納　／昭和八年九月吉日／黒門組

大きさ　巾二〇〇㎝　奥行九〇㎝　高七〇㎝　水鉢　縦五〇㎝　横八五㎝　深二〇㎝

後部下に次の連名あり　藤田　井口　西川　辰巳　桶谷　萩本　永原　増谷　萩野

菅本　井上　田中　山中　井上　杏井　岩井

つづら屋善右衛門顕影碑

銘　正面　つづら屋善右衛門顕影碑

裏面　享保年間元森町住民の／福利増進のため山林十七町余／

歩を寄贈せらる。

昭和四十六年十二月吉日／財団法人　元森自治会建立

大きさ　最大巾六二・五㎝　高一六〇㎝　厚一八㎝

二の鳥居

柱直径二八㎝　柱基部間隔二九〇㎝

石燈籠①②　神明型灯籠

銘　正面　献燈　側面　明治廿七年十一月　裏面　大阪鍛冶屋町／稲村救邦建立

総高　宝珠高　㎝　笠高三五㎝　火袋高三二㎝　中台厚一五㎝

基壇高七九㎝　最下基壇巾一〇〇㎝　竿高六五㎝

石燈籠③④　角型灯籠

銘　正面　③　弁財天

④　白髭社

側面　弘化三年丙午五月　（弘化三年…一八四六年）

裏面　氏子中

総高一八〇㎝　宝珠高一八㎝　笠高一八㎝　火袋高二八㎝　中台厚一五㎝

基壇高三七㎝　最下基壇巾七〇㎝　笠高六四㎝

石燈籠⑤⑥　神明型灯籠

銘　正面　献燈　側面　昭和八年二月廿二日　裏面　大阪南堀江／岩西利恒

総高一八五㎝　宝珠高三二㎝　笠高三八㎝　火袋高三四㎝　中台厚一七㎝

基壇高八〇㎝　最下基壇巾一〇〇㎝　笠高六㎝

石燈籠⑦⑧

銘　正面　献燈　裏面　明治参十六年五月建之

石燈籠⑨　変形角型灯籠

銘　正面　永代常夜燈　左側面　町内安全　右側面　願主　辻屋與八

総高一三一㎝　笠高一九㎝　竿高八〇㎝　基壇高三二㎝

奉納の期日は、願主　辻屋與八の記名から弘化二年（一八四五年）と思われる。



霊符社前花立

銘　正面　町内安全　側面　辻屋与八

総高九二㎝　上直径二九㎝　下直径一八㎝　高六一㎝　台座　巾三一㎝　横一〇㎝

奉納の期日は、石燈籠⑨と同じ。

石燈籠⑩　角型灯籠

銘　正面　献燈　右側面　明治九年子年吉日　左側面　岩井華治良／宮崎善七

総高一四七㎝　宝珠高二二㎝　笠高一八㎝　火袋高二五㎝　中台厚一四㎝

基壇高一三㎝　最下基壇巾四八㎝　笠高五五㎝

石燈籠⑪　角型灯籠

銘　正面　献燈　右側面　明治二十六年十一月立　左側面　古□屋□□

総高一六〇㎝　宝珠高二四㎝　笠高一三㎝　火袋高二三㎝　中台厚一〇㎝

基壇高三二㎝　最下基壇巾六〇㎝　笠高五八㎝

石燈籠⑫⑬　竿丸型灯籠

銘　⑫　辨財天

⑬　白髭大明神

総高一六五㎝　宝珠高一八㎝　笠高一五㎝　火袋高二五㎝　中台厚一三㎝

基壇高三四㎝　最下基壇巾五二㎝　笠高六〇㎝

石燈籠⑭⑮　神明型灯篭

銘　⑭　明治四十貳年壱月建之　森川由幾恵

⑮　明治四十貳年壱月建之　森川徳平

総高二五九㎝　宝珠高四三㎝　笠高二九㎝　火袋高三三㎝　中台厚二〇㎝

基壇高七二㎝　最下基壇巾九六㎝　笠高六二㎝

石燈籠⑯⑱　角型灯篭

銘　正面　献燈　裏面　嘉永元年申三月吉祥日　（嘉永元年　…　一九四八年）

側面　⑯辻屋與八　⑱灰屋茂兵衛

総高一九二㎝　宝珠高二四㎝　笠高一八㎝　火袋高二八㎝　中台厚二〇㎝

基壇高四五㎝　最下基壇巾七〇㎝　笠高六二㎝

石燈籠⑰⑲　神明型灯篭

銘　正面　献燈　裏面　弘化二年巳九月　辻屋與八

総高一九〇㎝　宝珠高二四㎝　笠高二二㎝　火袋高二九㎝　中台厚一五㎝

基壇高三九㎝　最下基壇巾七三㎝　笠高六一㎝



『白髭神社』神社の変遷についての考察

(1)　当白髭神社の創祀は大和長谷寺本尊十一面観世音菩薩の造立に当たって、神社の裏山に御衣木を上げ造立した。そこで近江国三尾からずっと初瀬のこの地まで御衣木を守護してきて下さった三尾明神をお祀りしたのが、この神社の起こりといわれている。菅原道真公が述作された『長谷寺縁起』の中で、徳道上人が仏様を造りたいことを道明上人に願われた。それに答えて道明上人が、語られている。その部分は次の通りである。

善哉とおからす神河浦に霊木あり　尤吉也　怪哉今夜一の夢を見る　異形の類数輩　かの木を中にして座列す　其の中に一人の童子蓋を持て　木をおほふ　亦木の下に白衣の老翁あり其形ことに微也　われ問ていはく　翁公は何人そ　又何事に此所に住するそ　こたえて云　我はこれ三尾大明神なり　此木をまほらんがために　本国より来る片時もはなれす諸の眷属を引いて来る又蓋をとる童子は即当山守護の童子なり　霊木彼請によりて　此山に来る所の相応ことの奇瑞と云々

(2)　行仁上人が書いた『長谷寺密奏記』には次のような記載がある。

三尾神　今云大河明神　御衣木守護の神也　西ノ丘頂ニ御座ス

この時点では祠の名称は『大河明神』で、御祭神は三尾明神のようである。

(3)　行仁上人は永承七年（一〇五二年）に長谷寺に安養院（現在廃院）を建立している。

寛永十五年（一六三八年）の長谷寺境内図では『大川の明神』と記載されている。

(4) 現在白髭神社に何枚かの棟札が残されている。その中で古い物として次の二枚からは、当時の神社名、祭神名、神職、役員等は不明である。

天保貳辛卯年　当社神主　天保二年（一八三一年）
奉　再建両宮皆造具一天下泰平五穀成熟氏子平安祈所
十一月吉日　藤井石見守藤原廣隆孝

安政四丁巳歳　当社神主　安政四年（一八五七年）
奉　再建両宮家根替外一切天下泰平五穀成熟氏子平安祈所
閏五月吉祥日　藤井石見守藤原廣孝

(5) 奉納された石燈籠の中で一の鳥居の下、石段前の両脇に弘化三年（一八四七年）銘の一対の石燈籠に、右側 弁財天　左側 白髭社と刻まれている。
ここで神社名、御祭神名がおぼろげながら判明してきた。

(6) 明治七年の神社取調書では、神社名は白鬚神社、御祭神は猿田毘古命、市杵嶋毘賣命となっている。



(7) 明治十二年神社明細帳では、神社名は白髭神社、御祭神は猿田毘古命、天宇豆賣命である。
ここで、神社名の文字が、明治七年 鬚 から明治十二年 髭 に変わっている。そして、相殿の女神が、市杵嶋毘賣命から天宇豆賣命に変更され（理由は不明）現在に至っている。このことは、明治初年に神仏分離令が布告され、廃仏毀釈運動のためだろう。

(8) 現状の白髭神社の様子は明治二十八年頃に整ったようである。次は、その時の棟札である。

明治貳拾八年
奉　仕造営天下泰平五穀成就武運長久氏子安全祈祷也
十二月貳拾日生日足日

棟札の裏面は
神職・発起人・
役員・周旋人の
氏名のみ

そしてこの年の前後に、多くの石造物の寄進がある。
例えば　①　一の鳥居　明治二十八年建立　②　門標　明治二十八年
③　石燈籠①②　明治二十七年　④　石燈籠⑪　明治二十六年　等。

# 白髭神社の分布

『白髭』と社名を持つ神社は少ない。一応、全国の白髭神社を資料から抽出してみた。白髭神社は、滋賀県高島町の白鬚神社が本社のようで、ここより祭神の御分霊を勧請して祭祀されているようである。

主祭神は猿田毘古命である。

〔註〕神社名の"ひげ"の文字には、髭、髯、鬚の三文字が使用されている。

○奈良県（奈良県史 5 神社）より 二社

白髭神社 桜井市 初瀬 木小路

白髯神社 吉野郡 川上村 中奥 十二社神社境内社

○日本全国（神社名鑑 神社庁発行 昭和三九年一月）より 十二社

白髭神社 山形県 上山市 中山

白髭神社 神奈川県 足柄郡 橘町

白鬚神社 福井県県 南条郡 今庄町

白髭神社 岐阜県 揖斐郡 久瀬町

白髭神社 福岡県 小倉市 蜷田町

白鬚神社 大分県 西国東郡 太田村

白鬚神社 東京都 墨田区 寺島町

白鬚神社 神奈川県 小田原市

白鬚神社 岐阜県 可児郡 可児町

白鬚神社 滋賀県 高島郡 高島町

白髭神社 大分県 中津市 大新田

白鬚神社 宮崎県 児湯郡 川南町

○猿田毘古命を主祭神としている神社 （白髭神社及び境内社は除く）

奈良県 五社 全国 二十社

○前記以外の神社で他資料から筆者が得た鎮座地

白鬚神社 三重県 鳥羽市 菅島 白鬚神社 和歌山県 日高郡 日高町

白髯神社 長野県 上水内郡 鬼無里村



# 『長谷寺境内図』

（紙本着色掛軸）

寛永１５年（1638年）

（長谷寺文化財調査室　甲田弘明氏模写、説明文解読）

境内図内の説明文

① 宇多院御臨幸両度御願寺供養の導師小野の益信しゅくわんだいごの聖宝縁起分明也

② 後長谷寺金剛宝石の上にたけ二丈六尺の十一面の尊像あり聖武天皇帝御願の大光大深秘菅丞相述作の□々たり

③ 本長谷寺本尊霊山会場のまんだら垂仁天皇の御宇に自然降下の尊也天武天皇御願いの大寺縁起同天皇勅作御宸筆あり

④ これより外皇居朝倉宮跡

仮名は出来る限り漢字に替えた

白髭神社に石燈籠等を寄進された 辻屋與八 は長谷寺、與喜天満神社へも寄進している。

○長谷寺、本堂への上り廊下、鐘楼から下へ四番目左側、一組と思われる宝篋院塔とその下の石燈籠がそれである。

宝篋院塔…総高　約三五〇㎝　部分的に工夫をこらした優れた塔である。

塔身四面月輪中に金剛界四仏の梵字を刻んでいる。

銘　弘化二年巳九月吉日　　辻屋與八　　弘化二年…一八四五年

石燈籠……総高　約二七五㎝

竿正面　梵字四文字

銘　弘化二乙巳年九月吉祥日　　辻屋與八

この石造物のすぐ上にも前記と同型、天保十五年銘の宝篋院塔と石燈籠がある。

天保十五年…一八四四年

○愛宕神社脇の石燈籠

道標形石燈籠…総高　約一四〇㎝　柱状の道しるべ形の石燈籠である

銘　正面　往来安全　右面　町内安全　左面　右伊勢道

背面　嘉永元戊申六月　願主　辻屋與八　　嘉永元年…一八四八年

○與喜天満神社境内の狛犬台座

與喜天満神社神殿前石段下両脇の一対の狛犬の台座に寄進者の氏名が連記されている。

その右側の狛犬に、辻屋與八の氏名が刻まれている。奉納は慶応三年（一八六七年）



## あとがき

当初瀬鎮座の白髭神社は歴史も古く、由緒もあり霊験もあらたかな神社であると思うが、残念ながら明治初期の神仏分離令により、資料が殆ど失われたようである。そこで、わずかな資料を手がかりにまとめた。今後、次の事項について何とか知りたく努力したい。

(1)　明治七年調査報告書の図面と現状の相違の経過。

(2)　霊符社の創祀とその経過と、併せて稲荷社の創祀について。

何か参考になる事項がありました節には、ご教示たまわりますようお願いいたします。

土井　正

白髭神社

発行　平成十年十月十五日　初版
　　平成十一年八月一日　改訂版

編集・発行　土井　正

奈良県櫻井市　初瀬　四三五〇
電話〇七四四―四七―七一七七